

葛藤型の姨捨説話

工藤 茂

日本に伝わる姨捨（親棄山）説話にはさまざまな型のそれがある。そのうちここでは、従来鬭争型と呼ばれている説話（注1）について検討を加えてみたい。

同型の説話をさらに詳細に検討してみると、そこにはおおよそ三種類のものがあることがわかる。一つは「大和物語」系のもの、もう一つは「日本霊異記」系のもの、そして三つめは老婆致富譚系のもの。それぞれの内容に大小の相違が存在する。だが、一人の男の嫁姑との葛藤を語るという点においては共通するものを持っている。以下それぞれの説話について考察していこう。

1 「大和物語」系

歌語り説話百七十余話が収められている『大和物語』は、天曆五年（九五二）ごろまでに成立したと言われている。この物語の中に次のような説話が掲載されている。

信濃の国更級といふところに、男すみけり。わかき時に親死にければ、をばなむ親のごとくに、若くよりあひそひてあるに、この妻の心いと心憂きことおほくて、この姑の、老いかままりてゐたるをつねにくみつ、男にもこのをばのみ心さがなく悪しきことをいひきかせければ、昔のごとくにもあらず、疎なること多く、このをばのためになりゆきけり。このをばいといたう老いて、二重にてゐ

たり。これをなを（ほ）この嫁ところせがりて、今まで死なぬこととおもひて、よからぬことをいひつ、「もていまして、深き山にすてたうびてよ」とのみせめければ、せめられわびて、さしてむとおもひなりぬ。月のいと明き夜、「「おぼども、いざたまへ。寺に尊き業する、見せたてまつらむ」といひければ、かぎりなくよろこびて負はれにけり。高き山の麓に住みければ、その山にはるばるといりて、たかきやまの峯の、下り来べくもあらぬに置きて逃げてきぬ。「「やや」といへども、いらへもせでにげて、家にきておもひをるに、いひ腹立てけるおりは、腹立ちてかくしつれど、としごろおやの如養ひつ、あひ添ひにければ、いとかなしくおほえけり。この山の上より、月もいとかがりなく明くていでたるをながめて、夜一夜ねられず、かなしくおほえければかくよみたりける、

わが心なぐさめかねつ更級や姨捨山に照る月をみて

とよみて、又いきて迎へもて来にける、それより後なむ、姨捨山といひける。慰めがたしとはこれがよしになむありける。（注2）
右に見るように、この説話の内容は『古今和歌集』巻第十七雑歌上に採られたよみ人しらずの八七八番歌、

わが心なぐさめかねつ更級やをばすて山にてる月を見て（注3）
の作歌事情を説くものとなっている。この説話を鬭争型の姨捨説話と呼ぶのは、男の「をば」と「妻」をめぐる葛藤があるからである。

（この妻（め）の心いと心憂（う）きことおほくて、この姑（しう

とめ)の、老いかゞまりてゐたるをつねにくみ、男にへこのをばのみ心さがなく(意地が悪く)悪しきことゝを訴える。その上、この姨がたいそう年老いて、腰が曲がって二重になつてゐるので、厄介扱いしてへもていまして、深き山に捨てたうびてよと男を責める。これが「男」とその「妻」と「をば」(姑)との葛藤である。そういう意味では葛藤型と言ひ直した方がいいのかも知れない。従つて私は今後この説話を鬭争型ではなく葛藤型と呼ぼうと考える。

これとほぼ同じ内容の説話が、『今昔物語集』卷第三十「本朝付雑事」「信濃国夷母弃山語第九」にも収められている。『日本古典文学大系』(岩波書店刊)の頭注(注4)に、へ本語は、大和物語(一五六)と同原の物語に基き説話を構成したと思われ、とあり、同じ源を持つ説話であろうと考えられる。次に引用するように『大和物語』よりもこちらの方が、その葛藤を分かりやすく描いている。

へ年老タリケル夷母(ヲバ)ヲ家ニ居(ス)へ(エ)テ、祖(オヤ)ノ如クシテ養テ、年来相副ヒテ過シケルニ、婦(ヨメ)は夷母が姑のように年老いて腰が曲がつてゐるので、ひどく憎んで男に彼女の悪口ばかり言う。男は聞くのも嫌だつた。それなのに次第に夷母を粗略に扱うようになっていった。夷母はますます老いて行く。へ婦ハ弥ヨ此レヲ厭テ、(略)夫ニ、「此ノ夷母ノ心ノ極テ憎キニ、深キ山ニ將行テ弃テヨ」ト云ケレドモ、夫、糸惜ガリテ不弃ザリケルヲ、妻強ニ責云ケレバ、夫被責レ侘テ「弃テム」ト思フ心付キテ……

さて、両者の説話に大きな異同はない。小さい違いを挙げれば次のようになる。どちらも説話の最後の方の部分であるが、一つは歌、一つは本文である。歌は前者のそれが、

わが心なくさめかねつ更級や姨捨山に照る月をみて
後者のそれは

ワガコ、ロナグサメカネテ、サラシナヤ ヲバステ山ニテルツキ
ヲミテ

である。歌の二句めが前者はへなくさめかねつで後者はへナグサメカネテとなつてゐる。『日本古典文学大系』の当該の頭注にへ国本の「ナグサメカネツ」を除き、諸本かく作るは、カネテキの意でなければ理合できない。大和始め古今集・古今六帖・新撰和歌集は何れも「かねつ」だ、とある。

ここでへ国本とは、国学院大本(水野忠欵旧蔵本)のこと。それ以外の諸本は全てへツではなくへテになつてゐるが、このへテは語法的にはへテキでなければおかしい。しかし、『今昔物語集』にはこのような使用法があるというのだ。校注者はそれを「短絡」という語で説明している。

本文の相違について見てみると、『大和物語』にはない次の二文が『今昔物語集』には挿入されている。

へ然レバ今ノ妻ノ云ハン事ニ付テ、由无キ心ヲ不可發ズ。今モ然ル事ハ有ヌベキ

へ(夷母弃山ヲ)其ノ前ニハ冠(カムリ)山トゾ云ケル。冠ノ巾子(コジ)ニ似タリケルトナム語り傳ヘタルトヤ

後者の一文はさておき、前者を読むとその説話集の性格が見えてくる。これは『大和物語』とは違って、教訓として語られたものである。

ところで、両説話集の成立には、ほぼ一五〇年ほどの差がある。その間に「わが心」の歌には、以上のような相違が生まれていたのであつた。この歌は「俊頼口伝集」(注5)ではさらに次のように変わつてゐる。

吾心慰めかねつ更科や姨捨山に月を見るとて

「俊頼口伝集」は『金葉和歌集』の選者源俊頼の歌学書で、「俊頼髓脳」「俊秘抄」または「俊頼無名抄」とも呼ばれている。『大和物語』よりは『今昔物語集』の成立年代に近い頃の成立であるが、下の句が右のように大きく変化している。しかしまた、世阿弥作とされる

謡曲「姨捨」ではヘシテワカ『わが心。慰めかねつ。更科や 地』姨捨山に照る月を見て照る月を見て〜と謡われているので、下の句の變化というよりは、伝承に揺れがあったと考えた方が正しいのかも知れない。この歌について「俊頼口伝集」は次のように述べている。

此歌は信濃国さらしなのこほりにおぼすて山といふ所のあるなり昔人のめいを子にして養けるが母のおぼとしおひてむづかしくなりければ八月十五夜の月くまなく明かりけるにこの母のおぼすかしいで、その山にすて、かへりにけりたゞひとり山のいただきによもすがら月をみてながめけるうた也さすがにおぼつかなかりければみそかに立かへりて聞ければ此歌をながめてぞなきおりける其後この山をおぼすてやまとはいへる也このさきにはかぶり山とぞ申けるかぶりのこしに、たるとかや

実はここには、前に述べたような男とその妻およびおば（姑）との葛藤はない。従つてその内容から考えて、厳密には葛藤型とは言えないであろう。けれども、説話の構成の類似と歌の内容という二つの面から一応ここに入れることにした。

さて、その内容を検討してみよう。大和と今昔の当該説話では男となつていた登場人物が、ここでは「人のめいを子にして養けるが」とあるようにめいつまり、女になつてゐる。従つて嫁は登場しない。このめいが、自分の養母であるおばが、年老いてむづかしく（やつかいに）なつたので、欺して連れ出し、山に捨てて来る。捨てられたおばは、ただひとり山の頂きに一晚中月を見て歌を詠じていた。それがこの歌だといふのである。大和と今昔ではこの歌を詠つたのは男であつた。ここにも両者に相違が見られる。つまり、前者はこの歌を男の歌ととり、源俊頼は女の歌とつたのである。古今集ではその作者を、「よみ人しらず」としている。それゆゑ作者の性別は分からない。ということとは、逆にこの歌の性格を示すものだと考えることができるのではあるまいか。つまりこの歌は、広く世に口承されてきた歌だつた

のである。

話はこの後、以下のように続く。めいはさすがに不安になつたので、ひそかに山に引き返した。すると、叔母はこの歌を口ずさんで泣いていた。それでこの山をおぼすて山といふのである云々と。しかし、この老婆がどうなつたかについては、そこには書かれていない。めいが心配になつて山へ引き返したのだから、おそらく連れて帰つたのだろう。この老婆が姨捨山に命果てるのは、姨捨山伝説であり、謡曲「姨捨」である。

三番目物・複式夢幻能「姨捨」は世阿弥の作とされる。佐成謙太郎の『謡曲大観』（注6）の「解説」に本曲は俊頼の無名抄を参酌したものとと思われるように、この歌を詠むのは男ではなくて老婆である。そして、「俊頼口伝集」のそのように嫁姑の葛藤もない。古今集の歌を軸に、白楽天や賈島の詩、あるいは定家の歌のイメージをちりばめて、一編の優れた戯曲に生まれ変わる。『謡曲大観』ではその「概評」のところで八月十五夜、名月の皎々と照り渡つた中で、山深く捨てられた老女が白衣をまとうて、静かな舞を舞ふのである。殆ど愚痴は洩らしてゐない、ただ世の中をあきらめ悟つて仏説を述べるだけである。まことにさびしくとした冷えたる曲である。世阿弥の所謂幽玄の極致はこのあたりにあるのであらうと思はれる曲である〜と述べている。

さて、舞台には二人の都の男（ワキ、ワキツレ）が現れる。そして、「かやうに候者は。都方に住居仕る者にて候。われ未だ更科の月を見ず候程に。この秋思ひ立ち姨捨山へと急ぎ候」と、ワキの台詞があり、道行きがあつた後、二人は姨捨山に着く。そこに一人の里女が現れる。都の男は彼女に昔姨を捨てた所はどこかと尋ねる。女は、

「姨捨山のなき跡と。問はせ給ふは心得ぬ。『わが心慰めかねつ更科や。』姨捨山に照る月を見てと。詠ぜし人の跡ならば。これに小高き桂の木。蔭こそ昔の姨捨の。その亡き跡にて候へとよ」と教え、

「旅人はいづくより来り給うぞ」と問う。男が都の者だと答えると、女は今宵また月と共に現れて旅人の夜遊を慰めましょうと消える。以上が前段である。里女は実は後段に現れる老女の霊で、昔、山に捨てられて死んだ姨であった。

後段は中秋の名月の光が降り注ぐ姨捨山。旅人たちの前に白衣の老女が現れ、月に関係する仏説を語り、舞をまう。いつか時が過ぎ、明け方が近づく。旅人たちは去り、昔捨てられた老女が今また旅人に捨てられる。曲は、

シテ『ひとり捨てられて老女が

地『昔こそあらめ今も又姨捨山とぞなりにける。姨捨山となりにけり

と老女の悲しみで閉じられる。

「大和物語」系の姨捨説話は、このようにして優れた芸術にまで高められたのである。

ところでこの説話は、「親棄畚型」の説話(注7)や「難題型」の説話(注8)のように外国種のものではなく、おそらく、日本において伝承されていたものであろう。そしてそれは、更科の姨捨山のイメージを「更級日記」等の日本文学の世界に投げかける役割を果たすことにもなったのである。同時に、そこを月の名所の歌枕とし、古来多くの風流人が信濃を訪れ、歌に俳諧にその山や月を詠んだのであった。芭蕉の「更科紀行」なども、こうして生まれた作品である。ここでは同じ芭蕉の「更科姨捨月之弁」から一節を引用しておきたい。

(前略)山は八幡といふさとより一里ばかり南に、西南によこをりふして、冷(すさま)じう高くもあらず、かどくしき岩なども見えず、只哀ふかき山のすがたなり。なぐさめかねしと云けむ理(ことわ)りしられて、そゞろにかなしきに、何ゆへ(ゑ)にか老たる人をしてたらむとおもふに、いと涙落そひければ、

俤は姨ひとりなく月の友 ばせを(注9)

2 「日本靈異記」系

江戸時代の歌人・和学者である下河辺長流は、一条兼良の『歌林良材集』の続編として『続歌林良材集』二巻を編んだ。その中に次のような歌とその歌に関する説話が収められている。

一奥山にしつか枝折はたかためそ我身を、きて捨る子のため

右むかしするがの国に住けるもの父の年老て死なぬことをうるさしと思ひてふじの山にもていきて捨むとてかの親をいて行にそのおや道すがら枝折して行是は我子のかへらん時に道をまよはさじがためなりさて山に入て父を捨んとする時たちまち地さけて此子ならくに落入らんとしければ父かなしびてかのもの、たぶさをとらへて此うたを読たりければ子のいのちたすかりけりといへりそれより後ふじの山をば枝折山と名付たりと云々(注10)

この説話は「枝折型」と呼ばれるもので、柳田国男が日本在来の「親棄山」だと考えた話である。母を捨てる話もあれば、父を捨てる話もある。ここでは父を捨てる話になっている。ただ、父を捨てる理由が「年老て死なぬことをうるさし(面倒で煩わしい)」となっているところが少々違う。この理由はむしろ葛藤型のそれに近い。もう一つ他と違うところがある。それはへ山に入て父を捨んとする時たちまち地さけて此子ならくに落入らんとしければ……というところだ。このような場面を持った説話があるのだろうか。そう考えて調べていくと、平安朝初期に薬師寺の僧景戒によって編まれた『日本靈異記』(正しくは日本国現報善悪靈異記)の中にあつたのである。それは、『日本靈異記』中巻の「悪逆子愛妻将殺母謀現報被惡死縁第三」という話であつた。

この話は、厳密には葛藤型の姨捨説話とは言い切れないかも知れな

い。しかし、その内容はよく似ている。花部英雄氏なども夙にそのことを指摘している（注11）。左にその全文を掲げてみよう。

吉志火麻呂者、武蔵国多麻郡鴨里人也、火麻呂之母者、早部真智也、聖武天皇御世、火麻呂、大伴名姓不分明筑紫前守所点、応経三年、母随子往、而相飭養、其婦者、留国守家、時火麻呂、離已妻去、不昇妻愛、而發逆謀、思殺我母、遭其喪服、免役而還、与妻俱居、母之自性、行善為心、子語母言、東方山中、七日奉説法花経有大会、率母聞之、母所欺、念將聞経発心、洗湯淨身、俱至山中、子以牛目毗母而言、汝地長跪、母瞻子面、而答之曰、何故然言、若汝託鬼耶、子拔横刀、將殺母頸、母即子前長跪而言、殖木之志、為得彼菓並隱其影、養子之志、為得子力并被子養、如侍樹漏雨、何吾子違思、今在異心耶、子遂不聽、時母侘僚、著身脱衣、置於三処、子前長跪、遺言而言、為我詠裏、以一衣者、我兄男汝得之也、一衣者、贈我中男貺也、一衣者、贈我弟男貺也、逆子步前、將殺母頸之頃、裂地而陷、母即起前、抱陷子髮、仰天哭願、吾子者、託物為事、非実現心、願免罪貺、猶取髮留子、々終陷也、慈母持髮歸家、為子備法事、其髮入筥、置仏像前、謹請諷誦矣、母慈深故、於惡逆子、垂哀愍心、為其修善、誠知、不孝罪報甚近、惡逆之罪、非無彼報矣、

右の概要を述べると、次のようにならうか。

吉志火麻呂（きしのほまろ）は、武蔵国多麻郡鴨の里の人である。母は日下部真刀自（くさかべのまどじ）といった。聖武天皇の御世に筑紫の防人になった。母は子とともに筑紫に行き、その妻は国にあって、家を守っていた。火麻呂は妻が恋しくて仕方がない。母を殺して喪に服せば、役を免れ、妻と暮らすことができると思ひ違ひをして、東方の山中に七日法華経を説く大きな会があると母を誘う。山中に至って火麻呂は、子牛の目のような目つきで母をにらみつけ、そこにひざまずけという。母は驚き、お前には鬼（もの）でも付いたかと、子

の顔を見つめた。火麻呂は佩刀を抜いて母の首を切ろうとする。母はひざまずいて言う。

「木を殖（う）えるのはその果実を得、木陰に隠れようとするからなのだ。子を養うのは子の力を得、子に養われようとするからである。恃んだ樹から雨が漏るように、どうしてお前は思ひ違ひをしているのか、怪しい心を持ったのか」

しかし、子は聴き入れようとはしない。母は落胆して、自分の著ていた衣を脱ぎ、三か所に置いて遺言した。

「これを我を偲ぶ形見にしなさい。一つは兄に、一つはお前に、一つは弟に贈っておくれ」

子が歩み寄って母の頸（くび）を切ろうとした。その時、地が裂け子が地に陥った。母は立って進み、子の髪を抱き、天を仰いで

「わが子は鬼（もの）が付いてこんなことをしたのです。本心からではありません。どうか罪をお許し下さい」と願ひ、なお髪を取って子を留めた。が、子は遂に陥ってしまった。慈母は髪を持って家に帰り、子のために法事をもうけ、その髪を筥（はこ）に入れて仏像の前に置き、追善のために僧に誦経を願って布施をした。

（母の慈（うつくしび）深きが故に、惡逆の子に哀愍（かなし）ぶる心を垂れ、其の為に善を修（おこな）ふ。誠に知る、不孝の罪の報（むくい）はなはだ近し、惡逆の罪彼の報なきにあらず、と）（注12）

この説話は右のように、母の慈悲を褒め、子の不孝の罪に対する現報を説いて終わる。これを葛藤型の姨捨説話として検討してみると、嫁が姑を嫌ひ火麻呂に母を殺させるのではない。男が妻と暮らしたいがために、母を山中にいざない殺そうとするのである。つまり、この場合は男の心理的な葛藤となる。また、ここでは母を山中に捨てるのではなく、殺そうとするのである。そこが、葛藤型姨捨説話とは違う。けれども、考えてみると帰ることの不可能な山に親を捨てることは、自分では手を下さなくても結果的には殺すことになる。従ってこの

説話もまた、葛藤型娘捨説話に分類することができるのである。このように親を殺そうとすることは、『新日本古典文学大系』の出雲路修の脚注によると、養老律では八虐の一つになるのだという。氏はそこに、へ祖父母、父母、に対しては殴つこと、殺そうと謀ること。伯叔父、姑、兄姉、外祖父母、夫、夫の父母、に対しては殺すことと注している。

『日本霊異記』に載っているこの説話は、『今昔物語集』巻第二十「本朝付仏法」に書承されて、「吉志火磨擬殺母得現報語第三十三」の題で収められている。細部に両者の相違が見られるが、大筋においてその内容は殆ど同じである。従って、ここには後者の最後の箇所だけを引用しておくたい。

実ニ知リヌ、不孝ノ罪ヲ天道新タニ憎ミ給フ事ヲ。世ノ人此レヲ知テ、殺サムマデノ事ハ難有シ、只懃ニ父母ニ孝養シテ、努々不孝ヲ不可成ズトナム語り伝ヘタルトヤ。

後半の、真心を持って両親に孝養を尽くし、決して不孝をしてはいけないと語り伝えたというところが、日本霊異記にはない今昔物語の新しさであった。

新日本古典文学大系『今昔物語集四』の小峯和明の校注によると、右の説話は『言泉集』『宝物集』『名大本百因縁集』『真名本曾我物語』等に引用されているとあって、引用や類話の多いことを教えられる。その中から十二世紀の『宝物集』のそれを覗いてみよう。

平康頼の『宝物集』は、へ一つ一つ完結した説話を寄せ集めた、いわゆる仏教説話集ではなく、むしろ作り物語の手法を使って、全体を立体的に組み合わせた単一の物語と山田昭全は解説している（注13）。その巻第六のへ仏だにも、子をおもふ心ざし、かく侍るめり。申さんや、人界はことほりにぞ侍るべき」という文脈の中に、以下のようにはめ込まれている。

天竺・震旦までは申さじや、我朝武蔵国に、玉の火丸と云者あ

り。聖武天皇御時京上して、人の供に、母などぐして鎮西へ下向して、太宰府にすみけるほどに、主人、京上しける供に、のぼるべきにてありけるに、思はしき妻をまうけたりけるに、はなれじとて、障をいだしてとまらんとて、母を山へ具して行て、ころさんとするに、大地俄にさけて、火丸落入けるを、髻を取て、引きあげて生けんとするは母なり。

ここでは、子を思う母のころざしの深いことを説く説話として引用されている。「玉の火丸」とは、勿論『日本霊異記』の「吉志火麻呂」のことである。内容は随分簡略化され、分かりやすくなっている。同時に子の不孝に対する現報についての言及は消えてしまっている。

ところで、これらの説話の最後の部分について『日本霊異記』（日本古典文学大系、新日本古典文学大系）の校注者は、次のように注をしている。へ雑宝蔵経・九・一〇九に、裂けた大地に陥る子の髪をとらえて助けようとした母の説話がみえる」と。この注に導かれて『雑宝蔵経』の当該部分を搜すと、巻第九の（一〇九）「婦女厭欲出家縁」に以下のような箇所があった。

（前略）地即劈裂。我子即時生身陷入。我即驚怖。以手挽兒。捉得兒髮。而我兒髮。今日猶故在我懷中。感切是事。是故出家。

右の経は、美女が自分の出家した因縁を説くという内容のもので、娘捨のモチーフではない。その内容をかいつまんで言えば、美貌故に早く子供を持つことになった婦人が、自分のその可愛い子供に恋い慕われ、子供の苦悩を救おうと危うく母子相姦の罪を犯す羽目になった時、大地が裂け子供が陥って死んでしまう。その時はとと掴んだ子供の髪だけが残り、婦人は出家した今でも懷中にその時の子の髪を持っているという話。従って、経の内容は『日本霊異記』の当該説話とは直接の関係はない。が、大地が裂けて子が陥る現報の発想へは何らかの影響を与えているのかも知れない。『日本霊異記』の編者景戒は薬師寺の僧だったのだから。

3 老婆致富譚系

関敬吾はその著『日本昔話大成9』（角川書店）において、「親棄山」の昔話を五二三A親棄山、五二三B蟻通明神、五二三C親棄畚、五二三D親棄山の四種に分類している。五二三A親棄山は難題を伴う親棄山の昔話である。同じ題名でも五二三Dの親棄山はそれとは大いに異なり、次の型を持つ昔話（注14）である。

- 1、夫婦で老いた親を山に捨てて小屋をつくって入れ、火をつける。
- 2、老人はのがれて呪物（小槌・玉）を得てよい暮らしをしている。
- 3、(a)女房（夫）が発見してこれをまねて失敗する。(b)女房は夫を小屋に入れて火をつけると死ぬ。

老婆を山に捨てる理由はいろいろである。へ嫁はその家があまりに貧乏なので盲目の母を山に捨てさせる（鹿兒島県喜界島）、へ婆が嫁をいじめた。そこで息子は婆を吠（かます）に入れて山に捨てに行く（岐阜県吉城郡）、へ村には六十一歳になると老人を山に捨てるならわしがある（山形県酒田市）、へ嫁が姑婆が虱をかむのを米だといって夫に山に捨てさせる（岩手県上閉伊郡）（虱をかんでいるのを米だといって婆を山に誘うのは青森県八戸市の昔話にもある）、へ夫婦が役に立たないと老婆を山に捨てる（青森県三戸郡）。

必ずしも嫁姑にまつわる葛藤ばかりではない。けれども以上に見るように、その葛藤によるものが少なくない。それゆえこの昔話も葛藤型の姨捨山に分類していいであろう。話の内容の特色は二つある。その一つは婆の捨てられた所（萱原・山小屋・山等）に火を放つこと。もう一つはそこが老婆の再生の場所になり、反対に老婆の真似をしやうとした者が、焼死することである。

『雑宝蔵経』巻第九を読んでいると、(一一二)「不孝婦欲害其姑反殺其夫縁」に以下のような話がある。

昔一人の婦（おんな）がいた。生まれつき性格が悪く、礼に従わず、常に姑に逆らっていた。婦は姑に怒られて怒りの心を募らせ、姑を殺す計略をめぐらした。婦は夫にその母を殺させようとした。夫は愚かであった。婦の言葉に従って自分の母を曠野に連行し、手足を縛ってまさに殺そうとした。その時突然雷が轟き、その兇に落ちた。母が家に帰ると婦は門を開き、夫と勘違いして姑を殺したかどうか尋ねた。姑は殺したと答え、明日になれば夫の死を知るだろうと思った。

右の話はへ不孝之罪。現報如是。後入地獄。受苦無量」という一行で終わっている。

もう一つ『日本霊異記』の上巻に、「凶人不孝養孀房母以現得悪死縁」第廿三という説話がある。その内容を極簡略化して記すと以下のようになる。

大和国添上郡に字を瞻保（みやす）という一人の男がいた。母親に冷たく当たり不孝な男だった。その男が後には山に入り、へ不知所為、乱髪身傷、東西狂走、復還行路、不住己家、三日之後、忽然火起、内外屋倉、一時皆焚、遂使其妻子等不能生活、瞻保無憑、餓寒而死、（以下略）ということになった。

原文のまま引用した箇所には、実は注目したいのである。瞻保は山に入つてなすところを知らない。髪を振り乱し、身を傷つけ、あちらこちらと狂い走り、道を行ったり来たりして自分の家にとどまらない。三日の後に火事になって、内外の屋倉を一時に焼失してしまう。そのためにも妻子も生活出来なくなり、瞻保も頼る所を失い、餓え凍えて死んでしまった。

この説話もまた『今昔物語集』巻第二十「本朝付仏法」の「大和国人、為母依不孝得現報語」第三十一に書承されて、伝わっている。以上に挙げた経や仏教説話には、雷の火に灼かれた不孝の子や火事

になった屋倉が説かれる。そしてこれらの説話はまた、民衆に仏法を説く時の材料でもあった。とすると、先に取り上げた昔話に投影されなかったとは言い切れまい。いささか飛躍し過ぎかも知れないが、特に不孝の子が火によって焼き殺されてしまう箇所には、このような説話の類想を見ることが出来るように、私には思われる。

以上、日本文学の中の娵捨説話のうち、葛藤型のそれについて展望を試みた。新しい発見について論ずるといふよりも、娵捨説話を分類整理する方向で述べてみたのである。3の項の昔話と説話の「火に灼かれる」という類想については、資料によるさらなる証明の必要性を感じている。

〈注〉

- (1) 例えば花部英雄「娵捨山私考」(『昔話伝説研究』第六号・昭和五十二年七月一日・昔話伝説研究会)では、この用語が既に用いられている。
- (2) 引用した本文は日本古典文学大系の『竹取物語・伊勢物語・大和物語』(岩波書店)による。
- (3) 『古今和歌集』(日本古典文学大系)から引用した。
- (4) 『今昔物語集五』の校注は山田孝雄・山田忠雄・山田英雄・山田俊雄の四人が担当している。
- (5) 「俊頼口伝集」の本文は『続々群書類従』第十五歌文部二(明治四十年七月二十五日・国書刊行会)による。
- (6) 佐成謙太郎『謡曲大観』(明治書院)の「娵捨」の解説。
- (7) 「親棄畚型」の説話・昔話のルートは中国伝来の『孝子伝』等によって中国だと考えられている。
- (8) 「難題型」の説話・昔話は『雑宝蔵経』にその原形があり、インド伝来のものとされている。

(9) 『芭蕉文集』(日本古典文学大系)から引用。

(10) 「続歌林良材集上」(『続々群書類従』第十五・昭和四十四年十月三十一日・続群書類従完成会)から引用。

(11) 注(1)の論文。

(12) 『日本霊異記』(新日本古典文学大系)の出雲路修の書き下し文を引用した。

(13) 『宝物集・閑居友・比良山古人霊託』(新日本古典文学大系)の「宝物集解説」による。

(14) 関敬吾『日本昔話大成11』資料篇(昭和五十五年九月五日・角川書店)による。